

アートによる心の応援チーム

# ARTS for HOPE

活動の軌跡

*Activity Report*

March 2011 ~ 2013



アートによる心の応援チーム

# ARTS for HOPE

活動の軌跡

*Activity Report*

March 2011 ~ 2013





ARTS for HOPE は、東日本大震災直後に立ち上がったアートを通じた心の応援チームです。希望が射す色や感動を届け、明日をつくる創造力を運び、地域の人々に寄り添いながら、長きにわたって心の復興を応援する活動に取り組んでいます。

## Contents

### 目次

ごあいさつ— アートを明日の希望に	2	特別寄稿「アートを通じて」	
数字でみるARTS for HOPEの取り組み	3	森 郁子(公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)	14
活動年表	5	高見のつぼ(俳優/作家/歌手)	16
ARTS for HOPEのプログラム		伊藤正樹(公立相馬総合病院小児科医師)	21
バッピードールプロジェクト	7	松井瑞子(聖路加国際病院形成外科医長)	23
バッピーペインティングプロジェクト	8	参加者、ボランティア、サポーター、支局スタッフの声	15, 17-19, 22, 24, 28
バッピーフラワープロジェクト	9	支援の輪	25
アートキャンプ「森のアート海のゲイジュツ」	10	今後に向けて— 子どもたちの成長とともに	27
アートリノベーション	11	広報の記録	29
スペシャルプロジェクト/わくわくプロジェクト	12	ARTS for HOPEについて	30
スペシャルサポーター	13		



たかはし まさこ

アーティスト・アートプロデューサー・NPO Wonder Art Production, Hospital Art Lab代表。米国州立 Western Michigan University 芸術学部卒。アメリカ現代美術のギャラリーを経て、美術館 Petit Musee のシニアキュレーターに。美術展覧会の企画やワークショップ、美術館運営に携る。1999年にWonder Art Production、2004年にHospital Art Labを設立。展覧会オーガナイザーとして世界のアートを紹介するほか、美術館や博物館における子どもの情操教育プログラム、医療現場や地域社会をステージにしたさまざまなアートプロジェクトを手がける。主な企画展覧会に「アマゾンの侍たち—人間・自然・芸術—」(2007年、川崎市岡本太郎美術館)「Street Art in Africa」(03~05年、国立民族学博物館、福岡市博物館他)など。病院に温かさを運ぶホスピタルアート活動は、全国と世界の病院77カ所にわたる。東日本大震災後の11年3月20日にARTS for HOPEを発足。

## アートを明日の希望に

東日本大震災からもうすぐ3年。延々たる瓦礫地帯を前に、何をなすべきか、どこへ向かうべきか、自問しつつ無我夢中で始めた活動は300回を重ね、物資とボランティアを乗せた車の走行距離は地球1.4周分を超えました。岩手、宮城、福島各県沿岸部をひた走り、自分たちの目で確認した過酷な被災状況。自分たち自身で探した行くべき場所。それらを引き続きフォローしてもらうために、3県各地在住リーダーと支局を設け、現地主導の活動も展開されるまでになりました。一面泥色の被災地に、希望が射す色をお届けしたい！アートの感動で心に命の輝きを灯したい！そして明日を創る創造力を運びたい！そんな思いだけを羅針盤に、まっしぐらにきたARTS for HOPE。しかし、応援し続けてくださった支援者の皆さまのお力なしには到底走り続けることはできませんでした。あらためて、深く、深く、感謝を申し上げます。そして私たちとともに笑いや感動を共有してくださった温かい東北の皆さま、素直なこどもたちとの運命の出会いに、心から感謝申し上げます。東北を復興することは、私たちの国を復興することだと思います。まだ先に長く続く復興への道を、人々の揺れる心と繰り返し触れ合いながら、地域とともに歩む活動を、これからも皆さまとともに続けていきたいと思っています。どうか私たちと一緒に力を合わせてくださることを切にお願い申し上げます。

ARTS for HOPEの活動をいま、あらためて振り返り本書にまとめることで、私たち自身も思いを新たに、東北に寄り添う活動の再出発にしたいと考えています。同時に、小さな支援チームが駆け抜けたアートによる復興応援活動の一つの記録を、皆さまと共有させていただければ幸いに存じます。本報告書の発行にご協力くださいました皆さま、本活動にご支援、ご協力くださいましたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

2013年12月  
ARTS for HOPE代表  
高橋雅子

## 数字でみる

# ARTS for HOPEの取り組み

2011年3月から2013年12月現在までのプログラム活動実績

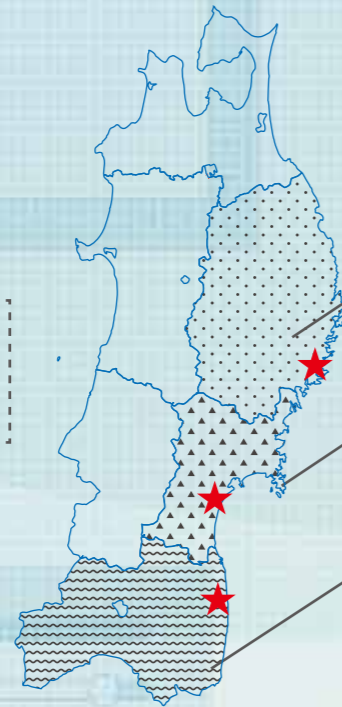
ARTS for HOPEは発足以来、各地の子どもの施設や仮設住宅を巡回し、「Happy Doll Project」(おしゃべりしながら願いを込めた人形をつくるプログラム)や「Happy Painting Project」(思いっきり色遊びを体現するプロジェクト)を中心に、地域やボランティアのご協力も得ながら、さまざまなアートワークショップやイベントをお届けしました。

プログラム実施回数 **303** 回  
避難所、仮設住宅、小学校、幼稚園、  
保育園、児童館、児童クラブ、病院などを巡回

新たに誕生した  
現地活動拠点★

**3** カ所

岩手、宮城、福島に支局(P30)を開設。  
現地スタッフによる  
プログラム運営がスタート



地域別の実施回数は、

岩手県 **48** 回

宮城県 **139** 回

福島県 **105** 回

その他 **11** 回

活動報告レポート配信数

**171** 回

PDF版活動報告レポートを  
日々メールで配信

活動を実施した地域

**8** 県、**37** 市区町村

東北各所を訪問。  
同一地域での継続実施も重視

# Our Activities in Figures

プログラム総移動距離

**5万5570.9** km

地球  
約 **1.4** 周分  
(子午線の周囲)



日本  
約 **3** 周分  
(本土域の海岸線)



スカイツリー(高さ)

約 **8万7651** 個分



富士山(高さ)

約 **1万4717** 個分

プログラム参加者

のべ **1万3946** 名

0歳から90歳代まで、年齢、男女を問わず  
多くの方々が303回のプログラムに参加

ボランティア参加

のべ **550** 名

国内は北海道から沖縄まで、  
海外からも参加。  
ボランティア登録は **108** 名



活動年表

2011年3月20日の発足以来、プログラムの実施回数は300回を超えました(2013年12月現在)。当初は避難所だった実施場所も、幼稚園や保育所、児童館、児童クラブ、病院、学校、仮設住宅の集会所や診療所等に広がりを見せています。目標としていた岩手、宮城、福島各県での支局開設も実現しました。

- ハッピードールプロジェクト (P7)
アートキャンブ (P10)
スペシャルプロジェクト (P12)
ハッピーペインティングプロジェクト (P8)
アートリノベーション (P11)
支局オリジナルプログラム
ハッピーフラワープロジェクト (P9)
わくわくプロジェクト (P12)
WAP 主催事業

2011

Table with 30 columns representing dates from 2011-03-20 to 2011-12-22. Each cell contains location names and activity icons.

2012

Table with 31 columns representing dates from 2012-01-01 to 2012-12-27. Each cell contains location names and activity icons.

2013

Table with 31 columns representing dates from 2013-01-01 to 2013-12-22. Each cell contains location names and activity icons.

# Happy Doll Project

ARTS for HOPEのプログラム 1

ハッピードールプロジェクト 

# Happy Painting Project

ARTS for HOPEのプログラム 2

ハッピーペインティングプロジェクト 



願いを込めたマスコット「ハッピードール」をつかって楽しむプロジェクト。カラフルで温かみのある布を使っておしゃべりしながら手を動かすと、会話も弾み、気持ちがリラックスします。子どもから高齢の方まで、年代も性別も問わず誰でも参加できることも大きな特徴。特に仮設住宅では大好評で、継続的に訪れている集会所がいくつもあります。ユーモラスでありながら、人の心を打つハッピードール。自由な発想で生まれる作品の背景には、それぞれの思い、それぞれのストーリーがあります。もともとは全国の病院で2006年から行っているプロジェクトで、これまでに日本各地とアメリカの病院、計50カ所以上を巡回しています。



心も体も解放して皆で一緒に大きなキャンバスに絵を描くプロジェクト。夏場は裸足になり、手も足も絵の具でいっぱいにして思い切り色遊びを楽しみます。なかでも人気があるのはシャボン玉を使ったプログラム。子どもたちの目に映るシャボン玉の世界が、豊かな色彩で表現されます。長く張り巡らせたビニールシートに絵を描くハッピーペインティングも好評です。まるで空に向かって描くような不思議なキャンバスに、子どもたちの感性が羽ばたきます。いつもとちがう特別な空間のなかで、自由にのびのびとアートを楽しむ時間。病院の患者さんや障がいを持つ子どもたち対象のプログラムも行っています。




# Happy Flower Project

ARTS for HOPEのプログラム 3

ハッピーフラワープロジェクト 

# Art Camp

ARTS for HOPEのプログラム 4

アートキャンプ「森のアート海のゲイジユツ」 



「希望の花を咲かせよう!」をコンセプトに、たくさんの人の手で作られた花の作品で空間を彩るプロジェクト。作品には復興への願いと東北に向けた応援メッセージが込められています。2012年3月、福島県相馬地方の伝統行事「相馬野馬追」の聖地<雲雀が原祭場地>で第1回目を開催。2013年に同地で開催した「ハッピーフラワープロジェクト」には、全国から2600点を超える作品が集まりました。大型のお絵かきキャンパスを設置して子どもたちと絵を描いたり、ゲストミュージシャンを招いたライブで大合唱したり、地域で楽しんでいただけるイベントとなりました。



夏休みを利用した、東北の子どもたちのリフレッシュキャンプ。自然物を採集してアート制作をしたり、山登りや沢登りに挑戦したり、さまざまな体験を通して東北各地の子どもたちが交流します。2012年から13年にかけて、計5回のキャンプを開催。気仙沼、石巻、登米、東松島、塩竈、仙台、名取、亘理、福島、郡山、いわき、相馬、南相馬など、17市町村から集まった子どもたちの2泊3日の共同生活は、かけがえのない思い出深いものになりました。プログラムで訪れた仮設住宅や小学校、児童クラブで出会った子どもたちとうれしい再会を果たすことも多く、彼らの成長した姿に出会える楽しみも格別です。

# Art Renovation

ARTS for HOPEのプログラム 5

アートリノベーション 

# Special Project Wakuwaku Project

ARTS for HOPEのプログラム 6&7

スペシャルプロジェクト  & わくわくプロジェクト 



「自分たちのまちを明るくしたい!」「まちの復興に携わりたい!」—そんな子どもたちの思いから始まったプロジェクト。自治体の協力のもと、老朽化した公園の遊具や外壁をリデザインし、地域の皆さんと一緒に明るく塗り変える活動に取り組んでいます。  
ARTS for HOPEの運営母体、Wonder Art Production(WAP)では、東京都立駒沢公園のアートリノベーションを2003年から毎年手がけてきました。また、医療施設の環境を温かいものに変えるホスピタルアート活動の一環として、埼玉県済生会栗橋病院をはじめとする病院で、先生や患者さんとの共同作業を通じた、アートによる明るく環境づくりのお手伝いをしています。そうした経験をいかしたプログラムです。



季節や対象に合わせ、また訪問先や連携団体のリクエストに応じて、通常シリーズをカスタマイズした「スペシャルプロジェクト」を実施しています。これまでに、地域のお祭りや、クリスマス会等の四季折々の催し、地元商店街のイベント等で、多様なスペシャルプロジェクトをお届けしてきました。ご依頼をいただく方々や団体とのコラボレーションも増えています。特別ゲストとしてアーティストを迎えてプログラムを行う「わくわくプロジェクト」は、これまでに俳優の役所広司さんや画家のMAYA MAXXさんをはじめ、多くのアーティストやミュージシャンが参加しています。WAPが行う病院での活動も連携プログラムとして実施しています。





やくしよ こうじ

1956年長崎県生まれ。俳優・仲代達矢主催の無名塾出身。83年NHK大河ドラマ「徳川家康」で織田信長役を好演し、脚光を浴びる。85年故伊丹十三監督の「タンゴボ」に出演。88年日本・スイス合作映画「アナザーウェイD 機関情報」で映画初主演。96年「Shall we ダンス?」「眠る男」「シャブ極道」で国内の14の映画賞で主演男優賞を独占。97年「うなぎ」、2001年「ユリイカ」など国際映画祭への出品作品も多く、国際的にも高い評価を受ける。その後も主演映画「十三人の刺客」「最後の忠臣蔵」などが公開され、12年紫綬勲章を受章。今後も中島哲也監督作品「湯き。」、小泉堯史監督作品「鯛の記」などの主演作が公開予定。日本を代表する俳優として活躍している。

## 役所 広司 (俳優)

ARTS for HOPEのスタッフ、またボランティアの皆さま、皆さんはあの日以来ずっと走り続けていますね。

東日本大震災から2年半が経ちました。

被災地の復興、再生は、想像を遥かに超えたいろいろな問題を抱え難航しているようです。

現場で活動されている皆さんは、それを肌で感じていらっしゃると思います。

皆さんの活動は、生活を支えるインフラ整備などとは違い

はっきりと結果が目に見えるものではありません。

しかし、皆さんがつくる「自由に自分を表現する場」は、

特に子どもたちの心のケアに役だっていると信じています。

心の傷を負った子どもたちが心身ともに健康に育っていく手助けのため、

これからもがんばって走り続けてください。

ARTS for HOPEの活動に参加している子どもたち、

高齢者の皆さんの笑顔にはいつもこちらが励まされています。

微力ながらこれからも皆さんを応援していきたいと思っています。



## Special Message Through the Arts

特別寄稿  
アートを通じて

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン/  
東日本大震災復興支援事業部 プログラム・スペシャリスト

森 郁子



## 復興を生きる毎日だから、「創作する遊び」を大切にしたい

2011年3月、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(SCJ)が宮城・岩手県の計19カ所の避難所に設置した「こどもひろば」には、毎日子どもの姿がありました。通い慣れた学校が突如生活の場となり、多くの子どもたちが深刻な事態を理解し、ことの成り行きを見守っていたことは、いまでも鮮明に思い出されます。当時歳の女の子が「週末は遊ぶけど、今日は無理。だって、みんな悲しそうだから」と話してくれました。子どもが子どもらしくいられる時間、安心・安全に遊べる場をつくり出すことが求められていました。SCJは2012年秋より、宮城県石巻市で「地域の遊び場づくり」事業を開始しました。0~6歳の子どもとその養育者が定期的集まり、子どもの発達に即した幅広い遊びに出会うこと、養育者同士のつながりをつくるのがねらいです。本事業では、遊びを「からだを動かす」「想像する」「コミュニケーションを用いる」「手をつかう」「創作する」の5つに大別し、日常にある何気ない遊びを乳幼児期の発達に着目しながら捉え直す活動を心がけました。各「遊び」のプログラム実施は、専門的な団体へ協力をお願いしていましたが、「創作する」遊びのパートナーを探しているときにお会いできたのがARTS for HOPE代表の高橋雅子さんでした。特に「創作」をテーマにした回では、伸び伸びとした表現活動や、たくさんほめられることを大切に活動にしたいと考えていました。そのため、この分野での専門性と知見が豊

富なARTS for HOPEさんにぜひお願いしたいということになりました。当日は「色」や「点と線」を中心にしたシンプルなプログラムをご提供いただき、月齢にかかわらず新しいものが生まれる瞬間を大切に活動になりました。指や足の裏に絵の具をつけて絵を描いたり、色が混ざる過程、線が重なる光景をじっと観察してみたり、子どもそれぞれの楽しみ方がありました。一方、自分を解放して子どもたちと絵を描くのは、養育者やスタッフにとっても、楽しいひと時となりました。日々の疲れで閉ざされた気持ちを解放する感覚は、非常に清々しいものでした。また、「普段は戦いごっこばかりで、お絵かきなんて減らさないんですけど…」と、この日アーティストに変身した息子の姿に感じているお母さまもおられました。忙しい毎日では、「片づけが大変」「絵の具を舂めないか心配」などの理由から機会が少ないお絵かきも、たまには汚れていい服を着て集まり、安全な画材を使って、子どもが思う存分創作に没頭する大切さを実感できる有意義な時間となりました。震災当時、子どもの遊びには、震災の影を感じさせることもあり、その対応に大人が戸惑うこともありましたが、また、色使いや描き方から震災の影響を読み取るうと気にかける傾向も見受けられました。しかしながら、本来、子どもた

ちの作品はその子のエネルギーそのものであり、表現できたこと自体がすばらしく、楽しいことです。今回その原点を思い出させていただいたと感じています。作品ができあがるたび、「すてきな色!」「このマルは、何かなあ?」と親子の会話が弾む光景がとても印象的でした。

震災後3年を迎えようとする現在、今後どのような活動が必要なのかを再検討する時期が来ています。子どもの遊びに寄り添うと、それは繰り返しの楽しみであることに気づかれます。つくって壊し、何回も描き、繰り返し読み、子どもたちは経験を積み、学んでいきます。活動終了時、高橋さんと「こういう活動を定期的続けることこそが必要なのではないか」というお話をする機会がありました。継続することは、まさに生活の一部になることと考えており、「創作する遊び」の参加者が、その経験を胸に活動を楽しく続けられることをSCJは応援しています。今後も復興へ向かって、子どもが伸びやかに「新しいものを創る」活動に定期的に触れる機会を持つことが子どもたちの力になると思います。大災害を経験した後の日常だからこそ、子どもや養育者が創作活動に没頭できる活動が息長く展開されていくことがいま、期待されているのではないかと思います。末筆にはなりますが、ARTS for HOPEのますますのご活躍、ご発展を心より祈願いたしております。

## From Special Supporters スペシャルサポーター



そえだ たかゆき

1950年福岡県生まれ。スタンダード通信社、サン・アド、仲畑広告制作所を経て副田デザイン制作所を設立。主な作品にTOYOTA「REBORN」、SHARP「液晶 AQUOS」、サントリー「ナマ樽」など。朝日広告賞、東京ADC賞、TCC特別賞、毎日広告デザイン賞、読売広告大賞など多数の受賞歴を持つ、日本を代表するアートディレクターの一人。

## 副田 高行 (アートディレクター)

東日本大震災が起こり、

茫然自失の日々を送っていた折に、

「ARTS for HOPE」と出会った。

アートディレクターとして、お手伝いできることはなんだろうと考え、ロゴタイプとポスターなどの制作をしてさしあげた。

震災で心に大きな負担を抱えた子どもたちにとって、

「ARTS for HOPE」の活動はとても大きな

励ましになると思う。



もり いくこ

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン/東日本大震災復興支援事業部 プログラム・スペシャリスト。2011年3月からは東北における支援活動に主に従事。継続的に、子どもの遊び場づくりに関わってきている。そのほか、ポジティブ・ディシプリン(前向きなしつけ)の日本国内の普及活動を担当。保育士。







## 坂口 ジェニファー

(リオ ティント ジャパン [株])



「意義あるボランティア活動への支援は、未来に向けた投資として位置づけ、継続的に行う」これが弊社の CSR 活動の理念です。未曾有の惨禍をもたらした東日本大震災から2年以上が経過した現在、その記憶の風化が一部で懸念されておりますが、震災の傷跡を、「アートの力」で癒すことに日々奔走されているARTS for HOPE (AFH) の皆さんの活動は、弊社のCSR理念にまさに合致するものであり、2年前よりその活動に協賛させていただいております。弊社からは AFH への財政面での支援と併せて、2012年には7名、2013年には6名の従業員とその家族が、被災地の子どもたちとのサマーキャンプのお手伝いをさせていただきました。参加させていただいた従業員は一概に、子どもたちの持つ強さ、優しさ、そして創造力のすばらしさを学んで帰ってまいりました。何もないところからでもつくり出せる「アートの力」によって、未来を担う子どもたちが一つでも多くのことを学ぶことが、復興への助力となっているのだと思っております。AFHの活動を通じて、笑顔を取り戻し、たくましさや学び、またその活動からの支援を受けた子どもたちが、将来困った人々を支えていくことができるように、弊社としては、この未来に対する贈り物への協力を、微力ながら続けていきたいと考えております。

## 高野 好眞

(店主／福島県南相馬市)



南相馬市で焼き鳥屋を営業しています。ARTS for HOPE (AFH) 高橋雅子代表との出会いは、2012年の「第一回のおまひ夢気球プロジェクト」がご縁でした。このイベントは、原発の影響で大勢の南相馬市民がまちを離れ、大半の子どもたちがいなくなったなか、事情があって、この南相馬市を離れられない子どもさんと親御さんに、相馬野馬追祭の神旗争奪戦が行われる「雲雀が原」に、この地方では初めての熱気球を呼んで、あの広い芝生の上で、短い時間でも、気球に乗って、気球を眺めながら、元気に楽しく過ごしてもらいたいと企画しました。いまでも忘れません。これに最初に高橋代表が店に来て、「イベントと一緒にさせてください」と。被災地ゆえ屋内だけでの活動だったなか、自分の企画を知って、ぜひ子どもさんたちと一緒に外で遊ばせたいとのことでした。開催直前に地元からの反対もありましたが、直接話し合っ得てくれたのが、主催者側の自分たちでなく高橋代表でした。おかげさまで、今年も一緒に開催できて、本当にいつも感謝しております。そんな AFHさんの活動もいまでは全国に広がり、代表を支える大事なスタッフの方たちも、少しずつ増えているようで本当にうれしいです。

## 小野寺 明美

(本吉絆つなぐたい事務局／宮城県気仙沼市)



(写真右)

### 「ほっぷ」アート

2013年8月22～23日にかけてARTS for HOPE (AFH)さんの全面的ボランティア、ご支援により工事現場のような色合いの建物が、花が一気に咲きみだれたように変身しました。2011年3月11日(金)午後14時46分、三陸沖マグニチュード9.0、未曾有の東日本大震災が発生。この地震は日本周辺における最大の地震となり、一変してしまった風

景や環境によりいつの間にか子どもたちの心が傷ついてしまいました。「笑顔を失う、暴力をふるう、物を壊す」などの行動が起き、震災から2年経過した現在もそのままでの状態で、家族も限界にきておりました。その笑顔を取り戻したく、「子どもたちが安らげる場所」をつくらうと、いままであった障がい児の親の会を解散。「本吉絆つなぐたい」という組織を新たに立ち上げ、皆さんからのご支援により居場所「ほっぷ」が完成いたしました。しかしあまりにもさびしい外見の建物に、完成当時は復興のためのどこかの建設会社の建物と思われていましたが、アートにより建物に命が吹き込まれ華やかな建物へと変身できましたのは、AFHの皆さんのおかげでした。現在この場所は子どもたちが大好きな所となり、賑やかに毎日を過ごしています。一歩ずつではありますが自力でがんばって元に戻ろうとしている彼らにとって、このアートは最高のプレゼントとなりました。ありがとうございました。

## 富澤 郁子

(大船渡保育園主任保育士／岩手県大船渡市)



### 子どもたちの心の解放を…と願い

3・11の出来事が子どもたちにどんな心的ダメージがあり、いつまでどんなかたちで続くのか、どう寄り添えるのか、何が有効なのか。身も心もぼろぼろで、意欲も湧かず、もがき悩む日々を送っている大人たちが子どもたちに寄り添っていきけるのか?—そんななか、音楽や絵画で、いっぱい遊んでいたいたり、いろいろな形で支援いただいたり、その時々を目まぐるしく、体当たりで時を過ごしていた感じでした。その一つひとつの積み重ねが、心の解放に向け薄皮をはがしていく作用を果たしてくれたと実感しております。全身を使い描く経験を ARTS for HOPE で繰り返すなか、園庭いっぱいセッティングし、子どもたちが周りを気にしないでエネルギーを爆発させ、心を解放し、はちきれんばかりの歓声と笑顔に包まれる活動として、私たち職員の中では位置づけられていました。今回の20メートル以上の厚手の透明なビニールシートに描く経験は初めてのこと。木から木に通路のように張られたシートに思いっきり筆を走らせ走り回る子ども、じっくりとどまって描く子ども、彼らの表情に圧倒される職員たちの姿がありました。どこでその作品は「完成」といえるのか? エネルギーを使い果たし、最後に透明な不思議な迷路空間を、夢中で走って通り抜ける圧倒的な興奮がありました。透明作品は、2013年11月17日の園内作品展で、園庭に不思議な道として張り巡らせ、また、子どもたちが夢中で駆け回る空間としてセッティングしてやりたいねと話合っているところです。心の解放ができた日をプレゼントいただき本当に感謝いたしました。ありがとうございました。

## 本猪木 功

(NPO 法人福島県ベンチャー・SOHO・テレワーカー共働機構相双支部／福島県南相馬市)



千年に一度と言われる震災と津波、引き続き発生した大人の手前勝手な理由により現在なお継続している災害は、将来を担うべき子どもたちに大きな重い傷を残しました。親世代が、ごくあたりまえに経験してきた草花や木々の緑に触れることも、川や海での水遊びも、公園の砂場で遊ぶことさえも、子どもたちには「それは、ダメ」と叱り声をあげる日が続きました。外での活動を制限された子どもたちからは、次第に笑顔が少なくなっていきました。2011年の震災から1年。子どもたちの心を大人が心配し動き始めた時期が ARTS for HOPE (AFH)さんの活動に触れた最初でした。地域のNPOや市民団体、商店街などのイベントで、ともに活動されていたAFHさん。お絵かきやペインティング、ものづくりなど、小さな子どもから興味を持ち、皆で一緒に取組めるプログラムで、子どもたちに寄り添い笑顔を届けてくれました。ニコニコ笑顔を見せながら、手や腕や、着ているものにまで絵具をいっぱいにつけて作品づくりに取り組む子どもたち。「子どもたちの笑顔は、周囲にいる大人たちをも笑顔にします」子どもたちの笑顔を引き出してあげることは大人のシゴトです。子どもたちが笑顔でいることができないうのは、大人たちが夢を語るができなくなっているからです。子どもたちの笑顔のために、大人も一緒に夢を見ましょう。AFHさんの活動は、そう問いかけているように感じます。









## 今後に向けて 一子どもたちの成長とともに

いまなお多くの人々が仮設住宅に暮らし、まちの再興計画に難儀し、土地のかさ上げ工事や瓦礫処理、除塩、除染、原発問題、さらにご遺体探しまで、気が遠くなる作業を同時進行で進めている——東日本大震災から約 3 年が経つ、被災地域の現状です。その荒涼とした現場を見る限り、私たちは、この先も長い復興の、実はほんの入口に立たされていることを実感します。

一時に比べれば落ち着きを取り戻し、平穏な日常が営まれ始めました。その一方で、将来への不安や絶望から自殺する高齢者が後を絶たず、うつ病や神経症を患う方々も増え、ストレスを抱えた学生の校内暴力や保護者による子どもへの家庭内暴力が増加し、小学校のトイレで子どもがリストカットするという信じがたい事件まで発生しています。せつかく生き残った命を自ら絶とうとする現実、地震や津波の恐怖や原発事故以上につらいものなのでしょうか。

私たち ARTS for HOPE (AFH) の活動が、いったいどれほど東北の子どもたちや人々の心を和ませ、希望の光を届けられるのかは明断できません。しかし、継続することで、命をつかさどる心がわずかでも救われ、灯がともり、やがて希望の光が射すまちへと再生する、その一端を担えることを信じて、地域の人々の心に寄り添い、ニーズの変化にも対応しながら、これからも活動を続けていきたいと思えます。

震災の風化と支援の減少で行き詰まる被災地の現状。何より、他地域との分断現象により忘れられ、置き去りにされていくことへの大きな心理的恐怖感を感じる沿岸部の人々が多く存在します。

AFH の活動でつながった人々の声が凝縮する本書の刊行を通して、現地の状況を多くの方に知っていただき、風化や分断が少しでも軽減され、この小さな国が一つになって心を合わせ、力を合わせて復興を進めていくことを切に願っています。

多くのアート関係者と同様、私たち AFH も、自分たちに何ができるのか、何をすべきか、実際にお役に立っているのか、悩みながら走り続けてきました。震災間もない頃、水彩ワークショップは津波を想起させ子どもたちのトラウマになるという専門家の見解が新聞に掲載され、現場の感触との違いを感じることもありました。どんな活動も、その影響や価値は、すぐにはわかりません。状況に応じて変化もします。手ごたえを重ね課題を修正するなかで意味が醸成され、時間の流れのなかで、人それぞれに価値が見えてきます。そこで本報告書では、AFH の活動を記録するだけでなく、「アートを通じた復興支援」について、多くの方々に語っていただくことを試みました。今回寄せられたたくさん声は、どれもいま残さねばならない貴重な言葉ばかりでした。

AFH は、これからも現地に繰り返し通い続け、人々と対話を重ね、自らの目で子どもたちの成長を見守り続けることで、自分たちの行ってきたアートを通じた心の復興支援の意味について考え続けたいと思えます。

震災から1000日を迎えた2013年12月4日  
ARTS for HOPE (文責：高橋雅子、若林朋子)

## ARTS for HOPE

「アートを通じた心の回復と地域の復興支援」

### これまでの活動の成果

#### 子どもたちの変化・成長

- 夢中になれる創作の時間が子どもたちを穏やかな心的状況に導き、笑顔を増やしました。震災で失っていた元の表情を取り戻した事例もありました。
- 運動不足解消のニーズを受けて取り入れた遊びや体操のプログラムが、ストレス緩和に大いにつながりました。
- 同じ地域での実施を重ねる中で、繰り返し参加する子どもたちの変化や成長を把握できました。

#### 大人の負担軽減、地域のケア

- アートプログラムを通じて、安心できる時間と空間を提供し、子どものケアをともに行うことで、教職員、児童館指導員、保育士、親など、子どもたちを守る地域の大人の負担軽減につながりました。
- 不安やストレスを抱える大人が、活動に参加しリラックスすることで、自信を取り戻す大きなきっかけになりました。高齢者のストレスケアと孤立防止につながりました。
- 子どもの問題にとともに取り組むための情報交換の機会、場となりました。
- 以上のような、高齢者を含む大人へのサポートが、地域コミュニティのケアにつながりました。

#### 地域主導の体制づくり

- 岩手(大船渡市)、宮城(仙台市)、福島(南相馬市)に支局を開設し、スタッフ主導の継続的なコミュニティケアの体制が整いました。労働環境が著しく悪化した現地で、働く場を生み出すことにもなりました。

#### 今後の目標

- 2021年までの継続的支援(10年計画で子どもたちの成長を見守る)
- 自治体、地元NPO、地元商店街等との協働による、さらなる地域密着
- 施設の特性や生活環境に応じた新たなプログラム開発

## 参加者、ボランティア、サポーター、支局スタッフの声⑦

### 徳永恵美子

(ARTS for HOPE 運営委員/  
レンドリース・ジャパン[株])



ARTS for HOPE (AFH) と YMCA の被災地支援にかかわり多くの方々々に経済的なご支援をお願いに回るなか、身に余る温かいサポートや励ましをお寄せいただきましたことに心より感謝申し上げます。AFH は小さなグループですが、その何百倍もの心ある方々のご尽力により支えられ守られながら、被災された方々の心に寄り添いたいと努めてまいりました。ここまで活動を続けることができたのは、手を差し伸べてくださったすべての方々のお力添えのおかげです。社会が全力をあげて復興を目指さなくてはならないこれから、子どもたち、シニアの方々、障がいのある方などをとりまく孤独と不安は、残念ながらもっと深刻になっていくと思われま。AFH のプログラムが目指すのは自分自身の心と向き合い、自分の可能性を信じようと子どもたちの心に勇気と情熱を取り戻すこと、また暗闇で一人で戦っている大人の方々も周りの人たちと笑いあうひと時により、苦しいのは私 1 人ではないと胸のつかえが少しだけ和らぎ、明日から生き抜くための希望の灯を見出してくださることにほかなりません。残念なことに多くの震災助成が終了してしまいましたが、AFH はこれからも多くの応援者の皆さまとともに、被災地の命と心を支えるプログラムを届けていきたいと思えます。活動継続のために多くの資金を必要としていますので、ご関心を寄せてくださる方々にぜひこのレポートをご紹介いただけますようご協力をお願い申し上げます。

- 自治体、地元NPO、地元商店街等との協働による、さらなる地域密着
- 被災地の「いま」を伝える情報発信



